

## 答辞

厳しい寒さも和らぎ始め、花々の芽吹きが新たな季節の到来を告げる頃になりました。

本日は私たち235名のためにこのような素晴らしい式を挙げてくださり、誠にありがとうございます。また、先ほどは、植村校長先生、在校生の皆様から、温かいお言葉をいただき、卒業生一同心から感謝申し上げます。

私たち32期生は、今日、この登美ヶ丘高校を旅立ちます。振り返ってみれば、この三年間に、数え切れない思い出があります。でも、何をおいても新型コロナウイルスに触れざるを得ません。

ウイルスが蔓延した三年生の一年間は、文化祭や体育大会、部活動など、「3年生になったら、こんなことをしよう」と思っていたことが出来なくなりました。今まで何のために練習を頑張ってきたのだろうと悔しかったです。頭の中には「なんで」という疑問ばかりが浮かんでいました。

6月になり、待ちに待った授業再開の知らせが届きました。最初の二週間はクラスの半分の登校でしたが、ようやくみんなに会えることが嬉しかったです。けれども不安もありました。みんなどれほど元気をなくしているだろうと、友達の顔を見るのが怖かったです。

でも、そんな心配は不要でした。クラスメイトが半分でも、会話を控えなければならなくても、教室はみんなの力強い笑顔であふれていました。みんな、家にいても、ちゃんといつもの「登美高生」でした。

それは私たちが1、2年生の二年間、友達と精一杯楽しんで、努力して、登美高生としての毎日を全力で過ごしてきたからだと思います。

三年前、入学を許可された頃、友達ができるか、授業についていけるか、期待と不安でいっぱいでした。しかし、日が経つにつれて、教室も賑やかになっていきました。春、充実した高校生活を送ろうと張り切っていた矢先、登美ヶ丘高校が閉校すると知らされ、驚きました。とても悲しかったけれど、すぐに私達の三年間を一生思い出に残る高校生活にしようと気持ちを切り替え、勉強、部活動に励みました。

初めての行事だった校外学習は野外活動センターに出かけました。昼食はみんなで作るカレー。ぎこちない手つきで包丁を握り、慎重な顔つきでルーを鍋に入れました。あのカレーのおいしさは今でも記憶に残っています。話したことがなかった友達とも仲が深まり、誰もが「私たちのクラスは一番だ」と団結力を感じました。

クラスで一丸となり、優勝を目指して戦った体育大会。50メートル走やリレーに挑み、友達に精一杯の声援を送りました。さらに、「逆玉」や、「tomiブリッジ」など、登美高

ならではの競技にも夢中になりました。「みんなでジャンプ」では、心を合わせて飛びました。クラスメイトが文字通り一つになった競技でした。

文化祭では、準備のために、毎日遅くまで学校に残りました。そして、みんなと協力し、一つのものを作りあげる素晴らしさを体験しました。やり遂げた後の達成感は忘れることが出来ません。1年生では、展示やゲートに挑みました。教室の装飾を考えたり、買い出しに出かけたり、中学校とはまったく違う活動に、「これが高校の文化祭なのか」と、わくわくしました。2年生では劇に取り組みました。衣装や脚本を作ったり、台詞を覚えたりと、忙しく、走り回っていたことが懐かしく思い出されます。また、ダンスは、クラス全員で振りを合わせるのが難しく、何度も練習しました。

登美ヶ丘高校でこんな生活を送りながら、私たちはちょっとずつ、確実に登美高生になって行きました。

その成果を実感出来たのは、修学旅行だったと思います。

みんな覚えていると思います。三日目、東京観光の日は台風の影響でどしゃ降りでした。思えば、観光をするには、最悪のコンディションでした。でも、誰一人として不満を口にしませんでした。それまでに培ってきた登美高生の力は、台風なんかには負けないくらいに、私たち一人ひとりの中で成長していたのです。横殴りの雨であろうと、びしょびしょになると、友達と話をし、一緒に東京の街を散策するだけで、私達の心は弾み、明るい充実感に包まれていました。

部活動でも同じです。試合で強豪チームと対戦するとき、大事な舞台に立つとき、足は震え、逃げ出したい気持ちに襲われました。でも、隣にいる友達を見たとき、自然に笑顔になり、勇気が満ちてきました。登美ヶ丘高校で、同じ夢を見、共に練習に打ち込んだ友達がいたからこそ、私達は最後の最後まで力を出し切ることが出来るようになりました。結果はどうであれ、私たち登美高生は最強の集団になりました。

生徒会でもいろいろな行事に取り組むことが出来ました。活動をしない日でも、毎日誰かが生徒会室にいました。行事の計画をしたり、一緒に勉強していると、いつの間にか、最終下校の時間になりました。何気ない会話で元気をもらい、行事に取り組むことが出来ました。

私達は、行事でクラス一丸となり、部活動や生徒会活動で力の限りを尽くしながら、みんなと一緒にどんな逆境でも、力強くいられる登美高生になることが出来ました。だからこそ、コロナウイルスのせいで学校に来られなくても、一度みんなと一緒になれたら、明るい笑顔になれたのだと思います。

行事は何もないと諦めていた3年生の一年間、鮮やかに記憶に残っているものは10月7

日に行われた球技大会です。私たちはコロナに覆われた重苦しい雰囲気を一気に吹き飛ばすようにはしゃぎ回りました。途中で降ってきた雨でさえ汗と一緒に、キラキラと輝いていました。あの3時間。私たちは32期生の絆を強く感じ、登美ヶ丘高校で出会えた奇跡を喜び合いました。

後になって、この球技大会は先生方が何の学校行事もない私たち3年生のために、用意してくださったものと知りました。先生方は、コロナへの対応、不規則な学習計画と、例年以上にお忙しかったと思います。そんな多忙な時にもかかわらず、私たちの生活に少しでも彩りを添えてくださろうと、苦勞して企画してくださいました。先生方、本当にありがとうございました。

思い起こせば、私たちが安心して高校生活を送ることが出来たのは先生方のおかげです。先生は言うて下さいました。「どんなあなたでも応援するからね」。このお言葉にどれほど勇気づけられたか分かりません。悩みを相談した時、先生にはきっと、「こうすれば良い」という正解があったと思います。でも、先生は、じつと私たちが自分なりの答えを出すまで待って下さいました。そして、その結論が、たとえ先生の意図されたものと違っていても、最後まで私たちを応援して下さいました。今、私たちが自分で選んだ道を、自信を持って歩むことが出来るのは先生のおかげです。

もう少しだけ先生に甘えていたいですが、でも、時は許してくれません。先生。最後にお願いがあります。今日、私たちの背中を優しく、そして力強く押して下さいませんか。最後の最後まで甘えん坊の私たちです。でも、先生の手でこの登美ヶ丘高校から送り出してくださいたいのです。私たちは思いきり羽ばたきます。そしていつの日にか、大きく成長した姿をお目にかけることをお誓い申しあげます。先生、本当にありがとうございました。

また、私たちの学校生活を支えてくださった事務室の先生方にも感謝申し上げます。欠席や遅刻の電話を丁寧に取り次いでいただきありがとうございます。そして、業務員の高瀬さん、福島さん、下司さん。夜が明ける前から学校を開け、いつも私たちが気持ちよく生活出来るように学校を美しく保っていただきありがとうございます。

2年生の皆さん、こんな頼りない私たちを先輩と慕ってくれてありがとうございます。皆さんと過ごした日々も大切な宝物です。

今年の文化祭の舞台、素晴らしいかったです。みんなで協力している姿を見て、私たちが先輩方から受け継いだものが、確実に伝わっていると安心しました。部活動も、たった数ヶ月しか一緒にいられなかったけれど、今、目標に向かって、互いに励まし合っている姿からは力強い登美高生を感じます。

登美ヶ丘高校35年の歴史は皆さんの代で幕を閉じます。頼もしい皆さんが最終ランナーで良かったです。皆さんならきっと大丈夫。全力で走り抜けてください。

そして、32期生のみんな。私達はみんな仲良しでしたね。こんなにも素晴らしい仲間と出会えたことは、奇跡以外の何物でも無いと思います。嬉しいときは共に喜び、悲しい

ときは一緒に涙を流してくれた友達。私以上に私のことを大切にしてくれたあなたに出会えたからこそ、毎日の授業も学校行事も部活動も、どれもがかけがえのない日々でした。この制服に身を包み、他愛無い話をしたり、笑いあえるのも今日で最後だと思うと寂しいけれど、私たちは「さようなら」とは言いません。32期生はどこへ行ってもつながっています。たとえ会えなくても、明日からも、ずっと一緒です。これからも共に歩みましょう。

最後に、お父さん、お母さん、家族のみんな。たくさん苦勞と心配ばかりかけましたが、三年間いつも近くで支えてくれてありがとう。思春期の私たちはなかなか素直になれなくて、私たちのためにかけてくれた言葉も素直に受け入れらず、反抗して、たくさんひどい言葉も言ってしまいました。それでも次の日の朝には、ちゃんとお弁当が用意されていました。受験の時も怖くて震える私に寄り添ってくれてありがとう。おとうさん、おかあさんのぬくもりが、どれほど不安を癒やしてくれたことか分かりません。当たり前だと思っていたことに、どれだけお父さん、お母さんの苦勞があったのか、今ようやく思いを巡らせることが出来ます。家族がいてくれるからこそ、今の私があります。本当にありがとう。もう少し、おとうさん、おかあさんに甘えることをお許しください。でも、これからは私たちにも頼ってもらえるように頑張ります。よろしくお祈りします。

いよいよ別れの時が近づいてきました。私たちはこれから、別々の道を歩むこととなります。新型コロナウイルスで日常は一変しました。地震や台風など自然の力も、時に私たちを苦しめます。これから私たちが歩む世界は何が待ち構えているか分かりません。でも、そこにはきっと私たちの力を求めている人がいます。私たちの手で変えていかねばならない社会があります。支えていかねばならない地域があります。その助けになれますように、明るい未来を築けるように、登美ヶ丘高校 32期生、235名は3年間の学びを胸に今、凜として一步を踏み出します。

最後になりましたが、登美ヶ丘高校の残り一年間が光り輝くものになりますように、そして私たちの母校「奈良県立登美ヶ丘高等学校」の名が永遠に誇り高く響き渡ることを祈念して答辞とさせていただきます。

令和3年3月1日

卒業生代表 島岡明日香